

2018年4月8日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「十字架の言葉」

聖書：コリントの信徒への手紙一1:18～31

パウロはこの「十字架の言葉」を聞く者は二分されるという。《十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。》

「十字架」とは、忌み嫌われるもの。犯罪者が処刑されるもつとも恐ろしく、醜いものである。ゆえに“キリストが十字架につけられた”とする教えを、「愚かなもの」と言うのは、ある意味当然のことである。神の子が捕らえられ十字架にかけられて殺されてしまう、そんな者が“救い主”というのか？・・・と。ユダヤ人の多くがそう思い、その出来事は躓きのもとであった。ギリシャ人もまた、神が人間の姿をとって此の世に生まれてくる・・・そんな馬鹿げたことがあるものかと、愚かなことを言うものよ、という。

その躓きには、人間側に「神はこうあるべき」という理想があるからであろう。ユダヤ人の神観は、力強いダビデ王のような、敵をなぎ倒す御腕を持ったものでなければならない・・・そういう理想があった。ギリシャ人もまた、ギリシャ神話に出て来るような、数多くの神に対する理想があった。

では、イエス・キリストはどうして十字架にかかれたのか？神の子が十字架上で苦しまれたのは何故だったのか？そこには二つの意味があるように思う。一つは、ヨハネ福音書3章16、17節に《神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。・・・》他、ヨハネの手紙一の4章。・・・という、私たちに「愛」を示すために「十字架」にかかれたと言う神の愛のゆえにというもの。命を投げ出すほどの「愛」。ただここには、やはり神の「強さ」「勇ましさ」が見え隠れし、ともするとその「強さ」「勇ましさ」だけを神そのものと思いがちになる。

もう一つは、パウロは自らの経験でこう語る。第二コリント12章7節からの言葉に、《・・・わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度、主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。・・・》(Ⅱコリント12:7～)弱さの中にこそ、神が宿られるとパウロは語る。他、マタイ福音書25章40節。

イエス・キリストの十字架には、私たちへの究極の愛が示され、また私たちが歩むべき道が示されていることになる。(神谷)